



室蘭工業大学

学術資源アーカイブ

Muroran Institute of Technology Academic Resources Archive



“To Tirzah” の意義

メタデータ	言語: jpn 出版者: 北海道言語研究会 公開日: 2013-11-29 キーワード (Ja): キーワード (En): Tirzah, Generation, Death, Imagination, Jesus 作成者: 安藤, 栄子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/2683

“To Tirzah” の意義

安藤 栄子

The Significance of “To Tirzah”

Eiko Ando

要旨： *Songs of Innocence and Songs of Experience* は 1794 年に出版された William Blake の初期の代表作である。そしておよそ 1804 年頃に書いた “To Tirzah” を彼はわざわざ *Songs of Experience* に含めたのであった。これはどのような意図で行われたのであろうか。1804 年は彼の後期の代表作品である *Milton*、*Jerusalem* 等が書かれ始めた年である。“To Tirzah” が後期の作品に見られる彼の思想を反映していることは予想されることである。このことはこれまでほとんど無関係と考えられてきた *Songs* と後期の難解な作品とが実は内的には関わっていることを示唆するのではないだろうか。このような観点から “To Tirzah” を解説したい。

キーワード： Tirzah, Generation, Death, Imagination, Jesus

1. <序文>

William Blake (1757-1827) の 30 代の秀作は *Songs of Innocence and Songs of Experience* (1794) である。これらの歌にはのどかな子供の世界とこれに対立する苛酷な大人の世界とが歌われていると言われている。これとほぼ同じ時期に一連の小預言書群 (*The First Book of Urizen, Europe, a Prophecy, The Song of Los, The Book of Ahania, The Book of Los* 等) が書かれたが、これらを総合し拡大したのが *The Four Zoas* (1795-1804), *Milton* (1804-08), *Jerusalem* (1804-20) 等の大預言書群である。*Songs of Innocence and of Experience* と大預言書群との間には 10 年の隔たりがあり、これらの相互の関係は稀薄であると考えられているようである。しかしながら筆者は両者にはある共通したテーマが隠されているのではないかと思う。この小論ではこの点を *Songs of Experience* に後年になって収められた “To Tirzah” を中心に考察したい¹⁾。

2. <Tirzah の世界>

“To Tirzah” は 4 連からなる比較的小さな詩であるのでまず全体を引用したいと思う。

Whate'er is Born of Mortal Birth
Must be consumed with the Earth

To rise from Generation free:
Then what have I to do with thee? (st.1)

The Sexes sprung from Shame & Pride,
Blow'd in the morn ; in evening died;
But Mercy chang'd Death into Sleep;
The Sexes rose to work & weep. (st.2)

Thou, Mother of my Mortal part,
With cruelty didst mould my Heart,
And with false self-deceiving tears
Didst bind my Nostrils, Eyes, & Ears: (st.3)

Didst close my Tongue in senseless clay,
And me to Mortal Life betray.
The Death of Jesus set me free:
Then what have I to do with thee? (st.4)

死すべき運命に定められたものから生まれた
どんなものでも地と共に消滅させられねばならない。
生成界（発生界）から自由に立ちあがるためには
それならば我は汝と何の関係があるか？ (第1連)

両性は恥辱と傲慢とから生じた。
朝に花開き夕べに死んだ。
しかし慈悲が死を眠りに変えた。
両性は起きあがり働きそして泣いた。 (第2連)

汝、我が死すべき部分の母よ、
汝は残酷さで我が心を作り、
偽りの自己を欺く泪で
我が鼻、目、そして耳を拘束した。 (第3連)

我が舌を無感覚な粘土に閉じこめた。
そして我を裏切り死すべき生に売り渡した。
イエスの死が我を自由にした。

それならば我と汝とは何の関係があるか？ (第4連)
(詩の和訳は筆者による)

表題の Tirzah という名は旧約聖書の雅歌(6:4)、民数記(27:1-11;36:3)、ヨシュア記(17:3-4)に由来すると思われる。雅歌では聖都 Jerusalem とともに麗しの Tirzah と呼ばれる都市の名である。民数記とヨシュア記ではツエロフハド(ZELOPHEHAD)の五人の娘の末娘である。彼には継嗣たる男子に恵まれず、彼の土地は娘たちに与えられたとある。Blake は Tirzah に興味を示し、彼女を男性の支配から独立した女性意志の象徴と捕らえたようだ。それでは “To Tirzah” ではどのような意味をもつのか。第1連からみていこう。

Whate'er is Born of Mortal Birth
Must be consumed with the Earth
To rise from Generation free:
Then what have I to do with thee?

ここでは「死すべき出産のもとで生まれたものは何であれ地と共に消滅されねばならない」と言われる。通常我々は母なる大地といい、大地に繁茂するすべての動物、植物、そして鉱物を生み出す母胎を大地と考える。Blake はこの生産の世界を Generation と呼ぶ。4行目の“I”すなわち「我」はこの詩の語り手であり、呼びかけられている相手“thee”「汝」とはおそらく Tirzah を指すと思われる。彼女は第3連目では “Thou, Mother of my Mortal part” と呼ばれる。つまり Tirzah は「我」をこの地上に産み落とし、死ぬ運命を与えた「この地上の母」なのである。しかし「我」はこの1連で死の世界から自由になれば「汝」とは何の関係もないではないかと言うのである。つまり第1連で「我」は死の世界にいることを自覚しており、しかもそこから逃亡できることをも確信している。これはどのようなことであろうか。つまり Generation には通常の意味以外の Blake 独自の意味があることをまず考えなければならない。Blake は Generation を「貪り食うものと食われるものとの血みどろの争いの場」、「衰退と死の世界」、「欲望が渦巻く闘争の世界」と述べる²⁾。端的にいえば修羅の世界であろう。この闘争の世界を牛耳るのが Tirzah という女性なのである。

それでは第2連を見てみよう。

The Sexes sprung from Shame & Pride,
Blow'd in the morn ; in evening died;
But Mercy chang'd Death into Sleep:
The Sexes rose to work & weep.

上の引用第1行目では男性と女性を意味する「両性」が「恥辱」と「傲慢」とから出現したことに言及される。我々は当然のことながらここに創世記の影響を感じるのである。人間の始祖である Adam と Eve とは神の庇護のもとお互い裸体であることを意識せず、まるで子供のように無邪気にエデンの園にいたのだが、蛇に変身した悪魔の誘惑により、二人は「食すれば死ぬ」と神から禁じられてあった善悪を知る「知恵の木」から食すのである(創世記 2:25;3:1-6)。二人は裸体であることを意識し、「恥じらい」、同時に神と同等の知恵がついたという「傲慢」な心を持つようになる。二人は神に逆らい原罪を犯し、エデンの園を追放される。二人はもはやかつての無心さを喪失し、産みの苦しみ、生活の苦悩を体験しながら時間と空間の此の世に生きなければならなくなったのである。キリスト教が強調するように新約の世界にイエス・キリストが誕生し、十字架上で贖罪死を遂げるまでは人類が犯した罪は許されることはないのである。

ところでこの第2連は創世記からの引用と思わせながら実はそうではない。そのように思わせる根拠は3行目 “But Mercy chang’d Death into Sleep”にある。「慈悲が死を眠りに変えた」と言う。創世記(3:23-24)によると Adam と Eve が犯した原罪に激怒した神は「生命の木」から彼らが食さぬようにケルビムをエデンの園の東に置き、さらに剣も置いたとあるところから死を眠りに変える優しさを旧約の神に期待するのは困難である。すなわちここに Blake 独自の考えを見なければなるまい。彼は別の作品の中で次のように述べる。

the Visions of the Night of Beulah,
Where Sexes wander in dreams of bliss among
the Emanations,
Where the Masculine & Feminine are nursed into
Youth and Maiden
By tears and smiles of Bulah's Daughters
Till the Time of Sleep is past.

(*Jerusalem*, plate.79,74-77)

この引用では “To Tirzah” の第2連目の1行目及び4行目に言及される “Sexes” 両性つまり男性と女性とが Beulah という「至福の夢」の世界を「放浪」と言われる。さらに両性と同一と考えられる “Masculine” と “Feminine” とが Beulah の娘たちの慈悲の微笑と涙とで大切に愛撫されて「若者」と「乙女」とに変身すると歌われる。これはどのようなことであろうか。まず Beulah であるがこれはイザヤ書や Bunyan の *Pilgrim's Progress* に由来し、「結婚」と「幸福の国」の意味があるようである。Blake によると Beulah は愛の月に照らされた夜の世界であり、眠りと休息の世界を意味する。そこはおそらく愛情溢れる Beulah の娘たちの世界であり、そこで大人の男女に眠りが与えられ癒されるのである。それでは大人の男女 (Masculine, Feminine) と若い男女 (Youth, Maiden)

はどのように違うのであろうか。ここで Blake の思想に少し触れたい。彼は人間の最高の精神界を *Imagination* と呼び、そこでは神と人間、そして自然とが一体である世界であると考える。いわば宇宙全体が調和されて一つに融合された世界なのである。しかし “*To Tirzah*” の「我」が堕ちた *Generation* は融合が崩壊し個々ばらばらの世界なのである。なぜならこの世界では利他愛ではなく自己愛が最優先されるため自己中心となることでお互いが無関心で孤立した世界とならざるをえないからである。「知恵の木」から食した Adam と Eve を祖先とする我々は本来二元的にしか物事を見ることができない存在であり、その人間が住むこの現象界はすべてが二元論で解釈されざるをえない論理的な世界である。論理が成立するにはたとえば善を確立し、悪は拒否され、排斥される。真をまもるためには偽は棄てられる運命にある。しかし理性中心の世界が明白に見えるのは一面的であり、皮相的であるからと言わざるを得ない。否定、疑惑、分析、実験等は理性の主な営みであろうが、Blake はとりわけ「否定」をとりあげると以下のように述べる。

The Negation is the Spectre, the Reasoning power in Man;
This is a false Body, an Incrustation over my Immortal
Spirit, a Selfhood which must be put off and annihilated alway,

(Milton,40,34-36)

Blake は「否定」は理性の働きでありそれが人間本来の姿を覆う「偽りの肉体」あるいは「自我」だという。善と悪い悪といってもその時代、状況でその価値は容易に反転することは可能である。つまり我々の言う善悪の二元論は相対的なものにしかすぎないのである。

Blake は *The Marriage of Heaven and Hell* の中で天も地も、善も悪も、真も偽もすべて人間の存在に必要であると述べる。これらの対立項からこの世は成立しているが、それは彼の言う *Imagination* の場から言えば理性的に価値が決められ差別が行われるのではなく、絶対的に肯定され、絶対的に依存し合うのである。それは対立し相争う世界がそのまま融合され調和された世界へと価値転換することといえよう。つまり「多」でありながら「一」という意義を持った世界なのである。

以上のことから “*To Tirzah*” で言及される「両性」という大人の男女は善悪の二元論に翻弄されて苦しむ人間の心の相を表していると思われる。しかし Blake の世界ではこのように悩み苦しむ魂を救う慈悲のあたたかな力が働いている。やがてその働きに癒されて妬み苦しんだ魂はさながら無邪気な子供のような若者と瑞々しい乙女とに生まれ変わるのである。先に引用した “*Where the Masculine & Feminine are nursed into / Youth and Maiden / By tears and smiles of Bulah's Daughters / Till the Time of Sleep is past.*” (*Jerusalem*) はおそらくこの真実を述べたのであり、大人の男女から若者の男女への変身は心の一大転換を示唆すると言えよう。別の言葉で言うと禅の公案の一つである「隻手の音声」⁴⁾ を聞くような純粹体験が Blake にはあったと言えるのではないか。

そうはいつでも死から生への生還は不可能である。第2連全体の時制は「過去形」で表現されているが、Generationの力、理性の働きの強さから抜け出すことのいかに困難であるかが4行目“The Sexes rose to work & weep.”に表れていると思われる。

3. <Tirzahからの解放>

それでは第3連、4連を以下に引用しよう。

Thou, Mother of my Mortal part,
With cruelty didst mould my Heart,
And with false self-deceiving tears
Didst bind my Nostrils, Eyes, & Ears:

Didst close my Tongue in senseless clay
And me to Mortal Life betray,
The Death of Jesus set me free:
Then what have I to do with thee?

ここには“cruelty”, “false self-deceiving tears”, “bind”, “close”, “senseless clay”等の単語により、Tirzah, Generationの閉塞性、虚偽性が浮き彫りにされる。自己中心の世界では他者を倒し己が優位に立つことが望ましいのである。微笑みながらも心は「冷酷」そのもの、自分の良心に反しても平然と偽りの涙も流せるのである。真実ではなく甘言追従が口をついてでてくるのである。人間の五感すべてが自我に拘束されてしまうのである。それはまさに生きてはいても死同然だとBlakeは述べている⁵⁾。閉塞された五感の世界と自我から解放された結果五感もまた無限に向かい全開された様子が*The Marriage of Heaven and Hell*の中の2つの引用において歌われる。

How do you know but ev'ry Bird that cuts the airy way,
Is an immense world of delight, clos'd by your senses five?
“A Memorable Fancy plates 6-7”

If the doors of perception were cleansed every things thro' narrow
to man as it is infinite.
For man has closed himself up till he sees all things thro' narrow
chinks of his cavern.

*Ibid.*plate 14

鳥が天空を無心に飛翔する姿を心からの歓喜をもって受け止め、自分自身も歓喜の渦に巻き込まれる体験をすることが、何にもましてTirzahの支配するGenerationから解放さ

れることなのである。

4. <イエスの受難>

この詩の歌い手は遂に善悪の二元論が支配する Generation から Tirzah の呪縛から解放される術を知ったのだ。

第4連3行目は“The Death of Jesus set me free:”である。「イエスの死」が「私」を救済してくれたのだ。キリスト教において「イエスの死」は「イエスの受難」を意味するのであり、それはキリスト教の最大のテーマの一つであろう。イエスが十字架刑を受ける前に「最後の晩餐」がイエスと12人の愛弟子たちによりとり行われた。この直後イエスは愛弟子の一人であるイスカリオテのユダの裏切りにより捕縛され、大祭司カヤパの官邸からピラトの法廷そしてヘロデ王の館へと盪回しにされ、さまざまな侮辱を受けた後処刑されたのだ。アリマタヤのヨセフの温かな好意により墓に埋葬されるが、3日目に復活し、弟子たちの前に顕現した後昇天するのだと言われる。

このような壮大なキリスト教のテーマに Blake も魅惑されたであろう。しかしながら彼はユダの背信行為、最後の晩餐にもほとんど関心を示さず、イエスの死には興味をせめしたが、それは以下のようなようである。

Thus was the Lamb of God condemn'd to Death.

They nail'd him upon the tree of Mystery, weeping over him

And then mocking & then worshipping, calling him Lord & King

(*The Four Zoas*, Night the Eighth, 325-327)

イエスは「神秘の木」の上で処刑される。イエスを殺害するのは Tirzah, Rahab, Babylon the Great という Generation の中核をなす理性集団である。Blake にとってイエスは Imagination と同じ意味を持つのである。「神秘の木」は「知恵の木」と同一視されると言われる⁶⁾。つまり「イエスの死」は Blake にとって人間の生命である想像力が理性に殺害されたということの意味するのである。これはキリスト教とは全く異なる見解と言えよう。さらにイエスの死に関して重要なことがある。*Jerusalem*, plate76 には十字架ではなく大きな木の上で磔にされたイエスの姿があり、この厳かな姿を見上げる人間がともに描かれている⁷⁾。この絵のイエスの面差しは静謐そのものであり、感動を覚えずにはいられない。あらゆる人間の葛藤を超越し全てを神に委ねた真実の謙虚さがにじみでているのだ。

ところで聖書では、イエスが自分の死を目前にして「エリ、エリ、レマ、サバクタニ。」と叫んだと書かれてある。これは「我が神、我が神、なぜ私をお見捨てになったのですか」という意味である。言語を絶する苦しみの中で沈黙を続ける神への訴えであり、それは絶望の言葉と受け取られかねない。しかし事実はそうではない。「エリ、エリ、サバクタニ。」は旧約聖書詩篇22にある神への悲しみの訴えである。しかしそれがやがて詩

篇28で神への賛美に転調し、さらに詩篇31の「真実の神よ、主よ、御手に我が霊を委ねます」という揺るぎない神への信仰告白へと続くのである。Blakeはイエスのこの最後の姿に完全に魅了されたのだろう。この無比なる自己否定の姿はBlakeが最高の精神界と呼ぶImaginationの世界である。「私」は実にこの真実に達したのである。そしてはじめてTirzah, Generationと別れることができたのである。さればこそ「我と汝とは何の関係があるのか」と歌い終わるのであろう。

5. < “To Tirzah” の挿絵 >

ところで小詩ながら難解なこの詩には挿し絵がつけられてある。画面左に2人の女性が瀕死の若者を介抱する光景が描かれる。右には前屈になった長い顎髭のある老人が水差しから水をその若者に飲ませようとしている。何よりも驚くことには、この老人が纏う長衣には文字が書かれてある。それは縦に “It is Raised / a Spiritual Body” とある。

「霊的肉体が甦った」のである。これも詩そのものに劣らず謎めいた言葉であろう。

これと関連してBlakeは以下のように述べている。

He (the Lamb of God) stood in fair Jerusalem to awake up into
Eden
The fallen Man, but first to Give [the Veil of Mystery *del.*] his
Vegetated body
[And then call Urizen & Luvah & Tharmas & Urthona *del.*]
To be cut off & separated, that Spiritual body may be Reveal'd.
(*The Four Zoas, Night the Eighth, 265-67*)

上の引用でイエスは墮落した人間を救うために “Vegetated body” を切り裂いて “Spiritual body” を露わにしたと言われる。すでに言及したようにイエスの受難は完全な自己否定を意味した。すなわち “Vegetated body” とは真実に目覚めず二元的世界に懊悩する人間の姿であり、イエスの死が示す完全な自己否定による真実の人間の有り様が “Spiritual body” という言葉で表現されたのである。すなわち自我を殺すことで二元的世界に拘泥しない新しい人間に再生することが可能であることがこの挿絵を通して示されたのである。この挿絵はまさに “To Tirzah” の詩の内容を端的に示したと思われる。

BlakeはHayleyに宛てた手紙の中で彼自身が自我に束縛されていたが、今やその呪縛から解き放された歓喜を述べている⁸⁾。この手紙は1804年に書かれたものである。その年はBlakeがMilton, Jerusalemに着手した年とも重なるのである。そしてこの“To Tirzah”もまた同じ年代に書かれたのである。

6. <結論>

以上述べてきたところから明らかのように、“To Tirzah”は Tirzah の支配する Generation という暗澹たる死の世界から光明あふれる Imagination, Spiritual Body への覚醒を歌い上げた作品である。しかもこれは大預言書群を貫いて流れる大きなテーマである。Blake はわざわざこの小詩を後年、1800年代に *Songs of Experience* に収めたということは、“Experience”と“Innocence”という概念が決して単純なものではないこと、そして後年になってますます Blake の心を捕らえてやまないテーマがすでに若き Blake の心に兆していたことを証明するのではないだろうか。この点 “To Tirzah”は極めて短い詩でありながら大きな意味を持つ作品であると言えよう。

引用文献

Blake の作品はすべて Geoffrey Keynes ed., *Blake Complete Writings with Variant Readings* (London: Oxford university Press, 1969)による。

聖書は日本聖書協会（1997）の新共同訳（旧約聖書続編つき）を主に参考にした。

注

- 1) Keynes 氏は “To Tirzah”は 1801 年頃に *Songs of Experience* に加えられたと考えるが、W. H. Stevenson は 1804-05 年頃か 1809 年頃に書かれたと推測する。(*The Poem of William Blake* (London: Longman Group Limited, 1971), p.590.
- 2) *The Four Zoas*, Night the First 22; Night the Seventh 390, *Europe* 2:5 等を参照
- 3) S. Foster Damon, *A Blake Dictionary* (Providence, Rhode Island: Brown University Press, 1973), p.42.
- 4) 禅宗の公案の一。両手を打って鳴らせば音が出るが、片手にどんな音があるかという意。白隠が初めて参禅する者に対して「隻手声あり、その声を聞け」といったのに始まる。隻手の声。(広辞苑)
- 5) “A Divine Image” (*Songs of Experience*) の第 1 連はまさに二元の世界に堕ちた人間の「冷酷さ」を歌い上げる。(Keynes, p.221)
- 6) S. Foster Damon, *A Blake Dictionary*, p.410.
- 7) Milton Klonsky, *William Blake: The Seer and His Visions* (New York: Harmony Books, 1977), p.104.
- 8) William Hayley あての 1804 年 10 月 23 日の手紙の中で “spectrous Fiend”と Blake が呼ぶ自我が粉碎された喜びが述べられている。(Keynes, p.851)

執筆者紹介： 室蘭工業大学教授

所属： 共通講座 言語科学講座

Email： eando@mmm.muroran-it.ac.jp